



Data 2023-91

監督：行定勲
脚本：小林達夫 / 行定勲
原作：長浦京『リボルバー・リリー』
出演：綾瀬はるか / 長谷川博己 / 羽村仁成 / シシド・カフカ / 古川琴音 / 清水尋也 / ジェシー / 佐藤二朗 / 吹越満 / 内田朝陽 / 板尾創路 / 橋爪功 / 石橋蓮司 / 阿部サダヲ / 野村萬斎 / 豊川悦司

👁️👁️ みどころ

企画力の乏しい近時の邦画界に、ハードボイルド・冒険小説の名手、長浦京の原作を元に、メチャ面白いオリジナル企画が実現！

時代は関東大震災の1年後。舞台は帝都・東京だ。冒頭に見る、陸軍による細見一家惨殺事件は一体ナニ？阪本順治監督の『人類資金』（13年）で見た“M資金”も興味深かったが、本作では陸軍の機密に深く関わっていた実業家・金融家の細見と、彼が一人息子・慎太に託した書類に注目！

本作が面白いのは、悪玉ぞろいの陸軍の“権益”に、若き日の山本五十六海軍大佐が絡むこと。“幣原（しではら）機関”の女スパイとして育ったリボルバー・リリーこと小曾根百合は今、歓楽街・玉の井のカフェ「ランブル」を経営していたが、慎太少年の危機を目の当たりにして、陸軍 VS 海軍の権益争いに飲み込まれながら、いかなる役割を・・・？

ミラ・ジョヴォヴィッチが主演した『バイオハザード』シリーズとは異質の“大正ロマン”漂う雰囲気の中、美しいドレス姿で華麗なるガンアクションに挑む綾瀬はるかの魅力をタップリ味わいたい。そして、シリーズ化が決定したかのような本作ラストに注目し、第2弾にも期待！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■主演は綾瀬はるか！この映画は一体何？監督は？原作は？■□■

私は『リボルバー・リリー』と題された本作のチラシを5月に入手したが、どうせくだらない最近のコミック本の映画化だろうと思って無視していた。ところが、一方で、主演が綾瀬はるかである上、監督が行定勲と知り、他方で、公開が迫る中で新聞での情報が増えていくにつれて、「こりゃ、必見！」と完全に見方が一変した。

原作は、私は全く知らなかったが、2017年に第19回大藪春彦賞を受賞し、一躍ハード

ボイルド・冒険小説の名手として注目を集めた長浦京。そして、同作は「明治と昭和の間（はざま）に生まれた新しい価値観を描いた」もので、全 656 ページもある長編らしい。チラシには「史上最強のダークヒロイン誕生」「小曾根百合とは何者か？」の文字が躍っている上、主人公が「幣原（してはら）機関」というスパイ養成組織で殺し屋としての腕を磨いたリボルバー・リリーこと小曾根百合（綾瀬はるか）、と聞けば、それは面白くないはずがない。

ちなみに、“女スパイモノ”の人気作品がミラ・ジョヴォヴィッチ主演の『バイオハザード』（01年）（『シネマ2』235頁）シリーズだったが、現在の邦画界で肉体的にも、美貌的にも、アクション的にもミラ・ジョヴォヴィッチと同じレベルの女スパイ役ができるのは綾瀬はるかのみ！

■□■本作の時代設定は？舞台は？こりゃ、面白そう！■□■

本作の時代設定は、1923年（大正12年）9月1日に発生した関東大震災から1年を経過しようとしている、1924年8月。舞台は帝都・東京、墨田区の歓楽街・玉の井の一角にあるカフェ「ランブル」だ。帝都と聞いて私がすぐに思い出したのは、荒俣宏の人气小説『帝都物語』。そこでは“怪人”加藤保憲が大活躍していたが、明治と昭和の間にわずか15年間だけ存在した大正の時代は、日本人にとっていわば空白の時代。それは、一方では大正デモクラシーの良き時代だったが、他方では戦争への道を着々と歩み始めた時代でもあった。そんな“混沌の時代”において、女スパイ、リボルバー・リリーは一体どんな役割を？

もちろん、百合は架空の存在だが、小説も映画も自由な発想で物語を作り上げることができる。同じ日に見た宮崎駿監督の原作・脚本・監督による『君たちはどう生きるか』（23年）は全然面白くなかったが、本作はメチャ面白そう！

■□■陸軍が細見一家惨殺事件を！？細見少年はどこへ？■□■

日本では、1932年（昭和7年）に5・15事件が勃発し、犬養毅らが暗殺された。また、1936年（昭和11年）には2・26事件が勃発した。本作冒頭、それと同じように（?）、陸軍と結託していた“投資家”（金融家）の細見欣也（豊川悦司）の留守宅が陸軍将兵によって襲撃され、細見の行き先を尋問された女中たちが次々と射殺される姿が描かれる。細見は1時間ほど前に上海に出発していたし、細見の一人息子・慎太（羽村仁成）は床下に隠れていたため難を免れたが、今東京の墨田区にある歓楽街・玉の井で1人、カフェ「ランブル」を営んでいる小曾根百合が読んでいた新聞では細見一家惨殺事件の犯人は、かつて細見欣也に仕えていた男、筒井国松（石橋蓮司）と報道されていたから、アレレ・・・。

他方、本作における主人公・百合の紹介は、滝田洋裁店でドレスの注文をする姿から始まる。大正時代の女性には和装が多かったはずで、百合もお店では和装だったが、滝田洋裁店では極上の生地を使ってドレスをあつらえていたらしい。『若き仕立屋の恋 Long version』（04年）で見たようなチャイナドレスではないが、手足の長い綾瀬＝百合がこれ

を着ればきつと似合うはずだ。ドレスの完成は1週間後だそうだが、その時点ではまだ百合の出自や幣原機関の女スパイとして受けていた訓練の姿や、今は引退している百合が過去に果たしてきた女スパイとしての役割等は一切語られない。

しかし、細見一家惨殺事件の犯人が筒井国松と報道されていることに疑問を持った百合が、1人で秩父にある国松の爆破された山小屋に赴き調べていると、そこに陸軍の姿が……。さらに、帰りの列車の中では1人で逃走していた慎太少年が、陸軍に発見され逮捕されようとする姿が……。そこではじめて見せる、百合の格闘能力は「さすが一流！」と感心させるものだが、『007』シリーズのジェームズ・ボンド並みに列車から飛び降りた2人は、さて、これからどんな逃避行を……？

■カッコいい岩見良明（長谷川博己）のキャラに注目！■

2020年のNHK大河ドラマ『麒麟がくる』で明智光秀役を演じた長谷川博己は、今や何でもござれの、ノリにノった名俳優に成長している。その長谷川が、本作では元海軍士官ながら今は引退し、弁護士事務所を営んでいるという、カッコいい紳士・岩見良明役を演じているので、それに注目！もっとも、玉の井界限を歩いていると、ケバウ化粧をした女（娼婦）たちから「先生！先生！」と声をかけられているところを見ると、この男、能力もあるが、「かなりの遊び人！」……？長年の友人である百合のカフェ「ランブル」に自由に出入りしている岩見は、百合から細見一家惨殺事件についての調査依頼を受けると、いとも簡単にそれを引き受けたからすごい。弁護士生活50年近くになる私には、一介の弁護士の調査能力など、たかが知れていることを思い知らされているが、海軍時代に教えを受けた山本五十六（阿部サダヲ）が、今や大佐となり大きな実権を発揮していることもあって、百合から受けた難解な事件についても、岩見の調査能力は相当なものらしい。

阪本順治監督の『人類資金』（13年）（『シネマ32』209頁）では「M資金」なるものが大きなテーマとされていたが、本作に見る実業家、投資家として陸軍の重要機密に関わっていた細見欣也は一体どんな役割を果たしていたの？なぜ陸軍から一家皆殺しという残忍な仕打ちを受けることになったの？そしてまた、命の危険を悟った細見が、一人息子に託した謎の書類と秘密の暗証番号は何を明らかにするものなの？岩見の調査の結果、陸軍が総力を挙げて生き残った慎太少年を探索していることが明らかになったが、すると、今そんな慎太と2人で逃走を続けている百合の運命は？

■ガンアクションの面白さ（1）ランブルでの銃撃戦は？■

私の小学生時代は、TVドラマ『拳銃男爵』（60～61年）がヒットしていたし、スティーブ・マックイーン『拳銃無宿』（58年～61年）も有名だった。近時はキアヌ・リーブスによる『ジョン・ウィック』シリーズが興味深い。もちろん、古き良き時代の西部劇では『OK牧場の決斗』（57年）、『誇り高き男』（56年）等の名作がある。しかし、邦画では拳銃アクションの名作は少ないので、本作ではパンフレットにある武藤竜馬氏（ガンアクションアドバイザー）、納富貴久氏（ガンエフェクト）のCREATOR'S VOICE「GUN」

は必読だ。

それによると、本作のタイトルとされている“リボルバー”は第一次世界大戦参戦直後に米国陸軍が M1911 自動拳銃の供給不足のために発注した軍用リボルバーの「S&W M1917 リボルバー」だが、もう 1 つ、慎太が父親から受け取った自動拳銃「バレッタ M1915」も登場するので、その功用や方式についてもしっかりと勉強したい。それに対して、日本軍が使用した「三八式歩兵銃」も有名だが、その威力は？

本作は、『リボルバー・リリー』というタイトルにもかかわらず、百合の登場はドレスの注文シーンからとされている。しかし、本作の見せ場となるべきガンアクション (1) は、慎太を連れてカフェ「ランブル」に戻ってきた百合を、陸軍の一部隊が取り囲み襲撃するシーケンスになるので、それに注目！

店の前を包囲する陸軍兵士の前に、たった 1 人ドレス姿で登場してくる百合の度胸は大したものだが、その部隊のど真ん中にリボルバーをぶっ放す勇氣もすごい。さらに、すごいのは店の中に逃げ込んだ百合を援護する奈加 (シシド・カフカ)、琴子 (古川琴音) たちの射撃の腕前だ。逆に言えば、そこで百合たちに敗北し逃げ出してしまう日本陸軍のだらしなさには呆れさせられるが、“そこは映画”と割り切って、本作中盤のガンアクションその 1 を楽しみたい。

本作では、岩見をはじめとする“善玉”役のかっこよさが光っているのに対し、陸軍陣営の小沢大佐 (板尾創路)、津山ヨーゼフ清親大尉 (ジェシー)、三島中尉 (内田朝陽) 等の面々はアホばかり……。当初から登場してくる平岡組 5 代目組長の平岡 (佐藤二朗) も、百合の最大のライバルとして登場してくる謎の男・南始 (清水尋也) も悪人面が顕著だ。本当はそんな単純なものではないはずだが、これは「映画だから」と割り切れば当然の話。本作では、善玉 VS 悪玉の配置をそのようにしっかり割り切って考えたい。

■□■あの時代、陸軍 VS 海軍の対立は？内務省は？■□■

国民的作家・司馬遼太郎の小説の中でも、1 番人気は『龍馬がゆく』。私は、その後半から描かれる“船中八策”を立案し、“万機公論に決すべし”(＝民主主義) と、“入札によるリーダー選びを新国家の根本政策にしよう”とした龍馬の姿が興味深かった。その結果出来上がったのが、明治維新による近代的統一国家日本の“民主主義”だが、日清、日露戦争を経て大正時代に入った 1924 年当時の日本の姿とは？その民主主義の姿とは？

1923 年 9 月 1 日に発生した関東大震災は誰のせいでもないが、そこで見せた帝都復活 (帝都改造) に向けた日本の底力は相当なものだった。しかし、他方で、軍拡競争に走っていた陸軍 VS 海軍の対立は激しかったらしい。また、今では総務省、かつては自治省と呼ばれていた官庁が当時は内務省だったが、その内務省が持っていた権限の大きさとは？

『リボルバー・リリー』と題された本作が単なるハードボイルドアクションなら、そのような大正時代の日本国の構造の問題点を指摘する必要はないが、本作には細見親子を執拗に狙う陸軍の姿が描かれるので、その理由についてしっかりと考える必要がある。そこに

「M 資金」と同じような国家財政や国家金融に絡む大問題が存在していたことが、本作や原作の面白さだが、何と更にそこには、陸軍（省）の権益の横取りを狙っている海軍（省）の山本五十六大佐が登場してくるので、それに注目！さらに、元は海軍で山本五十六の部下だったという岩見は今一介の弁護士だが、本作中盤では内務省警備局員の植村（吹越満）が、かつての部下だったという百合の過去を岩見に語る重要な存在として登場してくるのでそれにも注目！

■□■ガンアクションの面白さ（2）白いドレスで霧の中へ！■□■

来る9月22日に公開されるキアヌ・リーブス主演の『ジョン・ウィック』シリーズ第4作、『ジョン・ウィック：コンセクエンス』（23年）の謳い文句は、「世界77カ国初登場No.1！ノンストップ・キリングアクションは、世界的スケールに進化した！」。同シリーズでは「主席連合（ハイテーブル）」なる“裏社会の秩序”の厳守が絶対的ルールとされているから、その独特の世界を理解するためには、いくつかの抑えておきたいチェックポイントがある。

それに比べれば、大正時代の陸軍（の権益）は、とてつもなく大きいものだったから、いくら百合が幣原機関の優秀なスパイだったとしても、引退した後一匹狼として陸軍と“対峙”するなど到底ありえない話だ。山本五十六大佐が慎太少年の保護を確約する代わりに百合に突きつけてきた条件は、ある意味で海軍に身勝手なものだったが、それしか慎太少年の安全を確保する方法がないとすれば、百合の選択は1つだけだ。

しかして、本作のクライマックスとして登場するのは、霧深い日比谷の市街、海軍省の建物の前で展開されるガンアクション（2）になるので、それに注目！重大な秘密を握る慎太少年を連れて、百合が海軍省の中に突入していくのを阻止すべく、海軍省の前に部隊を展開しているのは陸軍だから、いくら百合のガンアクションが優秀でもそれを突破するのは不可能！誰もがそう思ったが、幸いなことに、本日の日比谷は濃い霧の中だ。この時、百合が着ているのが、本作冒頭のシーンであつらえた、あの白いドレスだというのがミソだが、それ以上に興味深いのが、私の中学時代に久保浩が歌って大ヒットした『霧の中の少女』ばりに、深い霧の中で百合が大活躍する姿だ。そこには、奈加や琴子の応援があったし、車で駆けつけてきた岩見が大量の爆弾を陸軍の守備兵に向かって投げ込むパフォーマンスもあったから、現場は大きく混乱！これならひょっとして、百合と慎太少年の海軍省内への突入も可能に・・・？

そう思わせる展開の中、白いドレスを真っ赤な血で染めながら、ド派手なガンアクション（2）を展開する百合の姿に注目！さあ、百合は山本五十六との約束を果たすことができるのだろうか・・・？

■□■シリーズ化が決定！？脱出した百合の新たな敵は？■□■

おっと忘れていた。私は本作における、“陸軍と海軍の対立”に人並み以上の興味を持ったため、評論もそこに重きを置いたが、通常の“対決型アクション”としては、ガンアク

ジョン (2) の前に、謎の男・南始と百合との“宿命のガチンコ対決”が登場するので、それにも注目！

『007』シリーズでもジェームズ・ボンドが立ち向かう“悪の権化”は毎回変化していくが、本作ではガンアクション (2) の終了後、岩見と 2 人で列車に乗って、幸せそうな逃避行 (?) を楽しんでいる百合の姿が登場するので、それに注目！2023 年 1 月 28 日に観た『レジェンド&バタフライ』(23 年) (『シネマ 52』206 頁) で、綾瀬はるか(織田信長の勝気な妻・濃姫)役を演じていたが、クライマックスとなる「本能寺の変」のシーンで突如登場してきた、ファンタジーのような信長と濃姫 2 人の海外旅行の姿にはビックリさせられた。こりゃ一体ナニ？いくら何でもこれはやりすぎ！

そう思ったが、無事慎太少年の海軍省への引き渡しを成功させた上での、本作ラストに見る百合と岩見の 2 人だけの逃避行は十分ありうる話だろう。そう思いながら本作のエンディングを楽しんでいると、キスを求める (?) 岩見の顔の先に百合が見たのは、列車の中をこちらに向かって歩いてくる眼帯の男 (鈴木亮平) だ。この男が何者かはわからないが、これを見れば本作のシリーズ化は確実！新たなストーリーでの、新たな百合の大活躍と、更なるガンアクションを期待したい。

2023 (令和 5) 年 8 月 15 日記